

大学一般教養専門書の読みの難易と文体的特徴

—日本語中級読解指導との関連において—

山本一枝

はじめに

大学の一般教養課程で、あるいは専門課程で、専門書を読むことが必要とされる留学生、外国人日本語学習者の数は、近い将来現在の10倍にまでふくらむことが予想されている(注1)。そういった現状をふまえ、大学で使用されている専門書について、その読みの難易、そして文体的特徴を把握し、それによって、日本語学習者の読解指導に関し、何等かの示唆がなされればというのが、本研究の目的とするところである。

大学一般教養専門書の読みの難易について検討する際、日本語学習者の読解力の発達水準といった側面からもその読みの難易、読みやすさを考慮する必要がある。そのためには、日本語学習者の、特に中級レベルの学習者の読み能力水準について評価しなければならない。故に、その目安となるものとして、現在広く使用されている日本語教科書について、読み教材としての側面から調査することにした。その結果から、大学一般教養専門書読解能力をつけさせるために、どんなことが指導されねばならないのか、専門書の特徴にもつながるいくつかの事柄について指摘できればと思う。

I. 研究の方法

文章、文体についてその特徴をとらえるには、いくつかの方法がある。そして、統計的把握はその一つの方法である。樺島忠男・寿岳章子両氏も「文体の統計的観察」(注2)に、「理想的な文体把握の方法は、先にあげた表現のあり方を数量化して統計的に把握することである。」と記されている。したがって本研究も、文体を客観的に数値でとらえることができる統計的把握による方法を中心に、調査を進めることにした。

次に、大学一般教養専門書の文体的特徴、それは大きくは論説文というカテゴリーに入れて考察されるものでもあろうが、それをどのような数値、データで把握するかが問題となる。

「読みやすさの基礎調査」と題する国立国語研究所による調査報告の中に、「読みやすさ」を尺度化するにあたっての三つの要素があげられている。それらは、a. 文構成の複雑さを示す要素、b. 難語の含まれ方を示す要素、c. 文語的表現あるいは会話的表現を

示す要素（注3）の三つである。そのaに含まれるものとして一文の長さ、bに含まれるものとして漢字含有率があげられている。この二つの数値は、これまでにも多くの研究において、文体を統計的に観察するため調査されてきたものである。そこで、本研究では特に文体について読みの難易の面から把握することをその中心課題としており、かつ、後へ他研究データとの比較検討をする必要上からも、この二つの指標、文の長さと同字含有率をデータとして収集し、専門書の文体的特徴把握の手立てとすることにした。

文の長さを調査する際、1文の自立語数による測定法、字数による測定法等があるが、本研究では、1文の字数による測定法を用いる。どのように字数を測定するかについては国立国語研究所による方法（注4）に準拠した。

II. 調査対象

今回、読みの難易に関し、文長と同字含有率を調査した資料は、全部で6種類である。大別すると、大学一般教養専門書3さつ、日本語教科書4さつである。データ収集に際しては、ランダムに採集するよう配慮はしたが、統計学的に完全にランダムな方法では行っていない。

日本語教科書で調査したものは、下記のものである。

1. 「日本語Ⅰ」国際学友会日本語学校編
1977年（初級用教科書、横書き）
2. 「日本語Ⅱ」国際学友会日本語学校編
1983年（中級用教科書、縦書き）
3. 「日本語表現文型 中級Ⅰ」「日本語表現文型 中級Ⅱ」
筑波大学日本語教育研究会 1983年
（中級用教科書、横書き）

国際学友会日本語学校編の教科書を調査対象に選んだ理由は、それが日本の大学入学を目的とする外国人学習者のために書かれたものだからである。そして、「日本語Ⅰ」終了時（日本語授業数約300時間）、つまり初級終了時の外国人学習者の読み能力発達水準を、その教科書の読みの難易から推測することにした。したがって、「日本語Ⅰ」は終わりの2課（34課、35課）の読みの難易を調査した。

又、中級の始めから中級教科書終了時までに、日本語学習者の読み能力水準の向上がどの程度図られているのかを見るために、中級用教科書の読みの難易を見ることにした。そ

れによって、中級学習者の読み能力水準についてある程度の推測が可能と考えたからである。したがって、「日本語Ⅱ」と、「日本語表現文型 中級Ⅰ、Ⅱ」をそのための資料として、データを収集した。「日本語Ⅱ」については、2課、11課、18課、25課の4課を、「日本語表現文型」については、1課、5課、10課、15課、20課の5課を調査した。ただし、「日本語表現文型」は 課が易しいものから難しいものへという構想の下に作成された教科書ではないので、その点を考慮してデータを収集した。中級Ⅰについては、読みレベルの異なる課の前半と後半のセクションを分けてデータを収集し、中級Ⅱについては課の後半のセクションのみから収集した。

大学一般教養専門書で調査したものは、下記のものである。

1. 「物理学」徳岡善助他 学術図書出版社 1978年
2. 「経済原論」片岡晴雄、富田洋三 高文堂 1982年
3. 「社会学」福武直編 有信堂 1980年

多くの分野に渡る大学一般教養専門書の中から、特に物理学、経済学、社会学の三分野のものを選択したのは、本研究に先立つ調査の結果（注5）を考慮してのことである。先の調査では、大学一般教養専門書9分野について、文の長さを含むいくつかを調べ、その結果によって大学一般教養専門書が、大きくは三つのグループに分けられることが分かった。故に、その結果をふまえ、本研究では 三つのグループをそれぞれ代表する専門書として、物理学、経済学、社会学を選び、調査対象としたのである。

Ⅲ. 調査結果と考察

1. 日本語教科書の読みの難易

日本語教科書の文の長さと言語含有率については、表-1のような結果となった。この

表 - 1

教科書	文数	平均文長(字数)	漢字含有率(%)
日本語Ⅰ	31	24.83	35.97
日本語Ⅱ	110	43.32	35.14
日本語表現文型Ⅰ 課の前半のセクション	45	23.71	28.49
Ⅰ 課の後半のセクション	36	37.88	38.92
日本語表現文型Ⅱ 課の後半のセクション	52	38.88	31.60

結果を昭和27年の国立国語研究所による学年別教科書調査の結果(注6)と比較して、考えてみたい。

まず、漢字の含有率について見てみる。どのような漢字が含まれていたかは別として、その含有率から言うと、高校3年の教科書は35.97パーセント、中学3年の教科書は30.23パーセント(注7)となっている。外国人学習者のための教科書の結果をみると「日本語Ⅰ」は35.97パーセント、「日本語Ⅱ」は35.14パーセントで、両者に関してはほぼ高校レベルと等しい含有率になっていると言える。「日本語表現文型」に関して結果を見ると、中級Ⅰの課の前半のセクション、後半のセクション、中級Ⅱの課の後半のセクションの三つの含有率に少なからぬ差異がみとめられる。つまり、その含有率は先にあげた中学3年レベルから高校3年レベルに渡っているのである。

表-1というのは、いくつかの課の平均の含有率を示したものであるが、実際には、漢字含有率は課ごとでかなりの違いがある。具体的数値で示せば、「日本語表現文型」では20.14パーセントから43.53パーセントの広がりがあるということである。そこで、各課ごとの結果について、参考のため表-2として、示しておくこととする。

表 - 2

教科書	課 セクション	文 数	平均文長(字数)	漢字含有率(%)
日本語Ⅰ (初級)	34課	15	21.2	45.91
	35課	16	28.25	28.98
日本語Ⅱ (中級)	2課	22	30.04	27.85
	11課	22	51.27	37.58
	18課	33	44.33	30.34
	25課	33	41.21	42.64
日本語表現 文型中級Ⅰ	1課 1,2,3	18	20.22	38.83
	8	6	4.9	43.53
	5課 1,2	9	31.77	26.22
	9,10	21	31.47	37.06
	10課 1,2,3,4	18	23.16	20.14
日本語表現 文型中級Ⅱ	11,12	9	45.44	38.63
	15課 4,5,6	22	46.31	27.87
	20課 8,9,10	30	33.43	35.39

漢字含有率については、野元菊雄氏が「話しことばに近づく新聞文章」（注8）に、新聞記事における調査結果を記し、論じている。その中で、昭和40年から50年を「戦後Ⅱ」としてまとめ、政治記事で漢字含有率49.0パーセント、社会記事で42.3パーセントと報告されている。又、国立国語研究所の昭和41年の朝日、毎日、読売の三紙の語彙調査の副産物として、漢字含有率が38.8パーセント（注9）になると記されている。こういった結果を今回の調査結果と比較してみると、日本語中級教科書が新聞の社会記事と同様か、又はその多くの部分についてそれ以下の漢字含有率であることが指摘できる。

このような比較が、読みの難易に関してどのような意味をもつのか。比較した両者につき、漢字で示される語がどのようなものか等に言及することなしに論ずることは、本質的に片手落ちと言えよう。したがって、深い意味での追求は 今回はできない。しかし、少なくとも読みについて、視覚的認知レベルにおける差異がよみの難易に影響を及ぼすという観点から、有意な比較ではあるまいか。漢字含有率は難語の含まれ方と関係をもつ数値として見られるわけであり、その点からも先の比較による結果は、読みの難易について新聞記事との関連において、何等かの意味あるものとして理解してよかろう。

次に、字数で示されるところの文の長さについて見てみる。先にふれた国研の調査によると、小学校3年の国語・社会・理科の教科書の平均の文の長さ（平均文長）は28.4字、小学校6年のそれは36.27字（注10）である。よって、「日本語Ⅰ」の平均文長24.83字は、小学校3年のそれより短いことが分かる。国研の調査は「日本語Ⅰ」が出版された時より25年も前のものであり、現在、文長が以前より短くなっていく傾向にある（注11）ことが報告されているおりから、単純な結論は出せない。しかしながら、少なくとも外国人学習者の日本語初級レベル終了時の教科書の読みの難易は、小学校教科書レベルと言って良いのではないだろうか。

では、初級終了後、外国人日本語学習者が中級レベルにおいて、どの程度までその読み能力水準を高めるよう教育されているのか。国際学友会中級教科書「日本語Ⅱ」では、平均文長43.32字で、国研の調査によると、先の小学校教科書と同様な方法で、中学3年の教科書は平均文長43.49字、高校3年のそれは46.99字となっている。したがって、「日本語Ⅱ」の読みレベルは、平均文長から見て中学3年レベルと言えよう。「日本語表現文型」では課の前半のセクションの平均文長は23.71字で、小学校低学年レベルである。後半のセクションの場合は、中級Ⅰでは37.88字、中級Ⅱでは38.88字であるから、先に述べた数値より、小学校高学年から中学のレベルと推定される。

ではここで、今回の調査結果から、明らかに留意されねばならないと思われた事実について述べておきたい。それは、今回調査した2種類の中級用教科書について、その平均文長にかなりの差が認められるという事実である。この事実から推測されることは、二つの教科書のどちらを使って学習するかで、学習者の読み能力到達水準に明らかな差が出てくる可能性があるということである。

日本語学習者の中級レベルにおける読み能力到達目標というのは、教育機関により、そして学習者の目的によりかなり異なる。したがって、初級終了時の到達水準のように一律に規定しきれない要素が含まれる。そうであればなお一層のこと、学習者の到達目標、目的に合わせた指導法が重要となってくる。この点からも、中級レベルの教科書と漠然ととらえてしまうのではなく、各教科書の差異、違いを厳密に評価、把握した上での教科書選択の大切さについて、あらためて、認識されねばならないと思われる。

2. 大学一般教養専門書の読みの難易

大学一般教養専門書の平均文長と漢字含有率については、表-3に示されるような結果となった。又、物理学、経済学、社会学のそれぞれの分野の文長について調査した結果をヒストグラムで示したのが、図-1である。

調査した専門書三分野の文の長さについては、平均で物理学 44.82字、経済学 54.47字、社会学 61.29字であった。三分野を一つにまとめ大学一般教養専門書の平均文長としてみると、53.31字となる。漢字含有率については、三分野に大きな差異はなく、物理学、38.64パーセント、経済学 39.08パーセント、社会学 37.49パーセントであった。全体として一まとめにした漢字含有率は、38.4パーセントとなる。

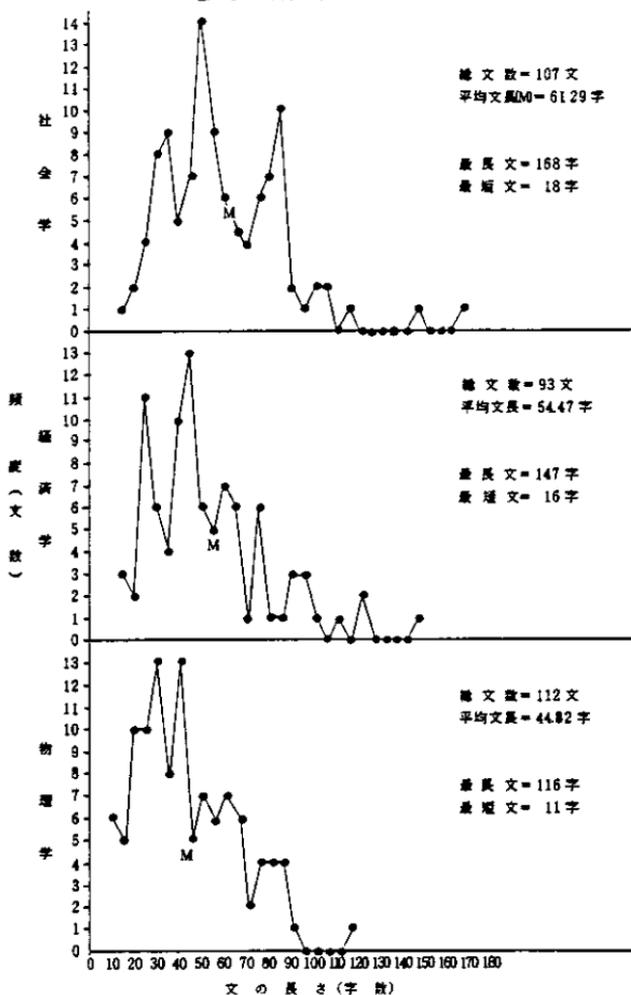
ここに見た三分野の専門書の平均文長につき統計学的に見て有意な差があるかないかを調べるために、t-検定を行った。その片側検定の結果は、物理学と経済学では、 $t = 2.89979$ で、信頼限界 $P \leq 0.01$ で有意であった。経済学と社会学では、 $t = 1.86372$ で、 $P \leq 0.1$ で有意であった。Kolmogorov-Smirnov Two Sample Test の結果も、片側検定において三分野間の相違は、統計学的に有意なものであった。物理学と経済学では、 $D = 7.59089$ で $0.01 < P \leq 0.05$ 、経済学と社会学では、 $D = 7.21741$ で、 $0.01 < P \leq 0.05$ 、物理学と社会学では、 $D = 20.944$ で $P \leq 0.01$ であった。

このような結果から、大学一般教養専門書と一口に言っても、専門分野によって文の長さには有意な差があることが分かった。このことはつまり、読みの難易について、明らかな差があることを示すものである。

表 - 3

専門書	文数	平均文長 (字数)	評準誤差	漢字含有率(%)
物理学	112	4.482	2.07	38.64
経済学	93	5.447	2.66	39.08
社会学	107	6.129	2.50	37.49
全体	312	5.331		38.4

図-1 大学一般教養専門書の文の長さ



では、この結果について、国立国語研究所が行った「読み易さ」に関する調査報告（注12）に照らして、考えてみたい。昭和26年にさかのぼったデータは、当時の雑誌16種について5グループに分けて文の長さ等を調査したものである。その結果を表-4（注13）として示すが、現在の雑誌に比べ、文の長さについては長めになっているだろうことを含みおいて、比較検討することにする。

表 - 4

グループ★	文の長さ(字数)	一頁当りの 漢字平均含有率(%)
A. 専門雑誌	75.7	45.7
B. 総合雑誌	58.7	39.5
C. 文芸雑誌	42.5	35.8
D. 大衆雑誌	37.5	32.6
E. 児童雑誌	29.1	19.9

★5つのグループに含まれる主な雑誌：

- A. 国語国文学，医学中央雑誌他
- B. 中央公論，文芸春秋の論説的なもの他
- C. 中央公論，文芸春秋の小説的なもの他
- D. 主婦の友他
- E. 少女，少年クラブ他

今回調査した大学一般教養専門書3さつの平均文長は、53.31字、漢字含有率は38.4パーセントであるから、ほぼBグループ、総合雑誌レベルの「読みやすさ」に匹敵すると見てよいだろう。ここで、先に述べた日本語中級教科書についても、同様に比較検討してみたい。まず「日本語Ⅱ」についてみると、平均文長43.32字、漢字含有率35.14パーセントであったから、ほぼCグループ、文芸雑誌に等しい「読みやすさ」と考えられる。「日本語表現分型」については、課の後半のセクションだけを問題とすると、中級ⅠとⅡの平均値で文の長さは38.38字、漢字含有率は35.26パーセントとなるから、ほぼDグループ：大衆雑誌の文長37.5字、漢字含有率32.6パーセントに近いと言える。

このように見てみると、つまり、今回調査した2種類の日本語教科書の読みの難易は、

大学一般教養専門書のそれよりは1ランクからそれ以上下のものということになる。しかしながら、大学一般教養専門書といっても分野により読みの難易にかなりの差があり、一まとめに論じることはできない。今回調査した三分野の専門書の平均文長の差異からも分かるように、物理学などは平均文長44.82字で、ほぼ中級教科書に近い平均文長をもつ。もちろん、読みの難易は文の長さや漢字含有率といったものだけでは評価できない要素を含む。内容に対する親しみ、興味の有無、あるいは又抽象語や専門語の含有率等といった要素が関わっている(注14)。したがって、いちがいに誰にとっても平均文長の短い物理学の方が、有意に平均文長の長い経済学や社会学よりもやさしいとは、言い切れない。しかし、少なくとも日本語の文構成の複雑さに関係する側面から見て、読み能力発達水準との関係において、一般的にどの分野が相対的に読みやすいかについて、学習者に何等かのアドバイスができるように思われる。

今回調査した以外の分野を含む9つの専門書について、調査の仕方は今回のものとは異なるが調査したデータ(注15)があるので、参考のために表-5として示す。

表 - 5

グループ	専門分野	文数	平均文長(字数)	グループ別 平均文長
I	物理学	55	40.6	}
	数 学	47	41.8	
II	情報科学	78	49.5	}
	経 済 学	66	53.4	
	生 理 学	68	53.5	
	生 物 学	81	57.0	
	心 理 学	77	58.9	
III	哲 学	64	59.4	}
	社 会 学	57	65.8	

3. 大学一般教養専門書の文末表現

先の統計的把握では扱えなかった文末表現の観察結果について述べる。一文の平均文長

が長い分野になればなる程、つまり先にふれた大学一般教養専門書の9分野でグループⅠからグループⅢに行けば行くほど、文末が単純でない表現で終わる傾向がある。ここで単純でない表現で終わる文末というのが何を指すかといえ、一文の最後の文節中に次の7つの表現を含むものを指す。つまり、その7つとは、1受身、2可能、3単純な否定ではない強調のための打ち消し、4推量、5意向、6使役、そして、7これらのものが2つ以上いっしょになったもの (Double) である。ここでは、この7つの文末表現で終わる文を以後marked文と呼ぶことにする。

文の最後の文節をどこで区切るかについては、「ている」等の補助用言は1文節と数えず、従って「～と定義されている」という文は、最後の文節に受身を含むmarked文と定義される。「～は正されなければなるまい」という文では、最後の文節に受身と強調のための打ち消しという二つの表現を含むから、Doudle・marked文ということになる。

このようなmarked文について、それがどのような比率で出現するかを、9分野の専門書について調査した結果を、表-6(注16)に示す。調査対象としたのは、どの分野の専門書についてもA5版5頁分に相当する部分である。使用した専門書は、先にあげた3分野以外の6分野については、後に列記する(注17-22)。

表 - 6

グループ	専門分野	文数	受け身	可能	打ち消し	推量	Double	意向	使役	marked文		グループごとの平均比率
										数	比率	
Ⅰ	物理学	55	5							5	9%	} 10%
	数 学	47	3	2						5	10	
Ⅱ	生物学	81	7	6	2	1	2			18	22	} 29%
	心理学	77	10	2	2	1	2	1	2	20	26	
	情報科学	78	14	6	1	1	1			23	29	
	経済学	66	6		7	3			3	19	29	
Ⅲ	生理学	68	17	6	1		1			25	37	} 41%
	哲学	64	3	2	11	6	3	1		26	40	
	社会学	57	7	8	3	1	4	1		24	42	
	合 計	593	72	32	27	13	13	6	2	165	27.8	

グループごとのmarked文の比率を見てみる。グループⅠに属するものは、marked文の平均比率が10パーセント、グループⅡは、29パーセント、グループⅢは41パーセントと、平均文長の長いグループがmarked文も増しているのが分かる。この二つの数値、平均文長とmarked文の間に見られる相関関係は、文の長さが文構成の複雑さを示す一つの要素であると同様、marked文の増減も又読みの難易に関わる要素を示す指標となりうることを示しているのではなからうか。

ここで、文末表現に注目した理由について述べる。一つの理由は、marked文と定義したものが文法上難易度が高く、それが読みそのものを難しくすることになると考えたからである。しかし、文末表現に注目した本来の理由は別のところにある。その理由とは、marked文の比率はより深く内容の読みに関わるもの、文法上の問題から区別されるところの読みの難易について、何かを示す数値となりうると思ったからである。ここで述べた、より深く内容の読みに関わるものとは、文末に表現されていると思われる筆者の意図、つまり判断、意見、見解、推測といったような論理の展開に微妙な陰影を与えるものの読みにつながるものを指す。

専門書の読みについて大きくとらえようとする時、本質的に、何を読みとらねばならないかに関して、二つに区別される読みがあると思われる。その違いは、専門分野が扱うテーマそのものの違いによって生じてくるものであると思われる。その二つの読みとは、そこに記された内容が事実の報告、あるいは定義づけといったようなものを中心とする文で構成されているものと、もう一つは、事実の上に構築された考え、又は理論を軸に、さらに論理を展開していこうとする内容の読みである。すべての専門書は多かれ少なかれ、この二つの読みを含んでいると思われる。しかし、専門分野により、どちらのタイプの読みがその中心となるかかなりの差異があり、グループⅢに属する社会学、哲学等は特に、後者のタイプの読みが多くなる分野と言えよう。そしてそういった分野では、平均文長も長くなっているが、marked文の比率が示すところのものは、文法上の複雑さからは区別される、平均文長とは異なる読みの問題である。

日本語を母国語とするものにとっても、そして当然、外国人学習者にとってはなおさら、後者のタイプの読みは、前者よりも難解である。そこで、専門分野により後者のタイプの読みの割合が、どのようになっているか統計的把握ができればと、文末表現をmarked文という観点から調査したわけである。しかし、このmarked文として測定した比率が、先に述べたような筆者の表現意図、論理展開とどのように関係づけられるか、文章論上からの探

求も未解決の問題が多く、厳密な考察は、今後の研究に待たざるを得ない。しかしながら文末表現、そしてその比率に注目することにより、異なるタイプの読みへの何等かの示唆、読解指導が可能になることは、確かと言えよう。

IV. 大学一般教養専門書読解指導について

今回の調査過程における観察をもとに、日本語学習者に専門書読解力をつけさせるため、重点的に指導すべきと思われる事柄について、専門書よりの具体例を挙げながら列記する。

1. 格助詞相当連語

本研究に先立ち、9つの専門分野につき、各々A4版20頁相当につき格助詞相当連語について調査した。その結果、用例総数755にのぼるものがそこに認められた(注23)。それらについて、文法標準表(注24)により分類、用法につき検討を加えた結果、格助詞相当連語の使用度の高さと、多岐に渡る用法が認められた。その事実を今回調査した二つの日本語中級教科書に照らして考えてみると、そこに取り扱われている格助詞相当連語は、種類の点からも、異なる用例提示の点からも大学一般教養専門書読解のために十分なものとは言えないことが分った。特に、頻出度数にして先の調査でも235、そして、153、そして105と多かった「によって」、「として」、「において」等は、その用法に広がりがあり、適切な指導なくしては、学習者にも正確な意味の把握、読解ができないと思われた。

事実、実際に国際学友会日本語学校のト、プクラスの学習者約15人に「日本語Ⅱ」の24課終了時に、格助詞相当連語に関する、次に示すような問題をやらせてみたが、不出来であった。その理由として、a～eに未習のものがあつ、かつ、「によって」の用法の中に未習のものがあることを、学習者自身あげていた。

格助詞相当連語の問題例

問. 下線の部分を言い換えるとしたらどの言い回しによって言い換えられるか。下記のものより適当と思われるものを一つ選べ。

1. 発達には、成熟によって生ずるものと、学習によって生ずるものとの2つの型がある。
2. 幼児が歩行を開始するようなことは、年齢が進むに伴って、だれでも自然に生ずるように思われる。
3. ピアノや自動車の運転などは練習によってはじめて上達するものである。
4. 子供の社会性の発達は、両親のしつけによって著しい影響を受ける。

5. これらは学習によって規定されるところが大きい。

[a, に基づいて b, とともに c, を通じて d, に応じて e, をもって]

2. 連体修飾の「の」

専門書には、内容の凝縮を図るために語と語が助詞「の」により結合されたものを含む文が多く見られる。そういった語連続は、時にはあいまいさを伴い、その意味するところは、そこに書かれる内容把握がなされなければ、ほとんど不可能といった場合も多い。つまり、読みによる内容把握ができなければ、その語連続の意味するところも正確につかめないということになる。村木新次郎氏が「しかし、規則そのものがあまり完全ではない、不十分であるために、規則性を見い出すのもあいまい性を見い出すのも同じ現象の表と裏ということになると思われる」（注25）と指摘される問題が、そこにひそむわけである。とにかく、専門書の読解力向上には、そういった「の」による凝縮表現に習熟させ、その正確な意味把握ができるよう指導することが必要である。「人間の心理学」（注26）の中の一節、理性と衝動についての14文中に見られた具体例17を、参考として次に記す。

1. プントの心理学, 2. 「意識」の心理学, 3. われわれの心理学, 4. 人間の心理学, 5. 意識の全体, 6. 夢の中, 7. 自分の理性, 8. 人間の心理現象, 9. ほんの一部, 10. 他の大部分, 11. 「無意識」の状態, 12. 無意識の部分, 13. 多くの場合, 14. 無意識の衝動, 15. 意識化の操作, 16. かれの立場, 17. 多くの弟子。

3. 長文、難解文の分析

文は一般に70字を越えると読みにくくなると言われ、もっとも読みやすい文の長さは40字前後である（注27）。こういった観点から、一般教養専門書の文の長さについてもう一度見直してみる。すると、70字を越える長文の比率がかなり高いことが分かる。図-1から70字を越える長文の比率を見てみると、物理学では、全体の14パーセント、経済学では22パーセント、社会学では35パーセントになる。一番長い文を見ると、物理学で116字、経済学で147字、社会学で168字である。このような結果からも、長文の読解、分析能力を養うことが専門書読解には不可欠と言えよう。さらに、グループⅢの社会学のような分野になると、一つのことを記すのに、二文に渡る表現でなされていたりするものが出てくる。次に、生物学からの70字を越える長文で、かつ2文で言わんとするところが表現されている具体例を記す。

「教養の生物学」（注28）9頁宇宙と生物より

太陽系以外の宇宙における生命体存在の可能性について、ウォルド（1952）は、銀

河系の恒星（総数 1,500億個）がおのおの平均10個の惑星をもつとして、惑星 100万個あたり1個の割合で生命の存在をゆるす条件をそなえていると仮定すると、銀河系内だけでも10万個の惑星に生命体が見られる可能性がある。全宇宙には銀河系と同じような恒星集団が数十億もあるといわれているから、この推定を全宇宙に拡張すると、生命体のみられる惑星の数はさらに増加すると述べている。

4. 漢字語彙の語構成とその結合ルール

専門書には、二字漢語、三字漢語、そしてそれらの結合からなるもの等、多く出て来る。特に、非漢字系の日本語学習者にはそういった漢字語彙結合基本ルールを含む漢字語彙に対する知識を増やすことが大切であろう。

その他、専門書に特有な言いまわし、語彙、文末表現等についての指導もあげられよう。

V. 結び

大学一般教養専門書の文体的特徴を、文の長さと言語漢字含有率と言う二つの数値によって把握し、読みの難易について検討してみた。その結果、調査した三分野の専門書について文の長さの平均は、53.31字、物理学、経済学、社会学のそれぞれの平均値は、44.82字、55.42字、61.29字となった。t-検定の結果、この三分野の差異は統計学的に有意なものであった。

文の長さは、文構成の複雑さを示す指標と見られるから、この結果は読みの難易に関しても有意な差があることを示唆するものである。つまり、一般教養専門書と一口に言っても、分野により読みの難易に明らかな差があるということの意味する。

漢字含有率については、三分野の平均含有率は38.4パーセントで、専門分野間で含有率に大きな開きは見られなかった。全体として、今回調査した大学一般教養専門書の「読みやすさ」について国立国語研究所による調査結果に照らしてみると、ほぼ総合雑誌の「読みやすさ」にランクづけされる。

上記の結果を、日本語中級学習者の読み能力水準の点から考察するために、日本語教科書についても同様な調査を行った。そして、日本語中級教科書の平均文長と漢字含有率には、調査した2つのものでかなりの差があることが分かった。同時に、「日本語表現文型」の課の後半のセクションで 38.38字、「日本語Ⅱ」で 43.32字という平均文長は、一般教養専門書の 53.31字に比べると、そこにかかなりの差が認められた。先に述べたように、専門分野により平均文長には有意な差があり、分野によっては日本語中級教科書とほぼ等しい

平均文長をもつ分野もある。しかし、全体としては、大学一般教養専門書の読みの難易は、国立国語研究所の結果に照らして、中級教科書よりほぼ1ランク上と考えられる。

さらに、大学一般教養専門書の文末表現に注目し、*marked*文を定義して調査した結果から読みの難易について追求した。*marked*文の比率によって、文構成の複雑さからくる読みの難易、つまり文の長さにより評価されるものとは異なる側面からの読みの難易を、把握しようとしたわけである。文末に表現されている筆者の意図、例えば判断、見解等につき*marked*文の比率との関連から論じようとした。しかし、今回の調査では、文の長さが長い分野ほど*marked*文の比率も高くなる傾向にあることは分ったが、文章論上の問題との関連については、未解決事項も多く、はっきりとした結論はだせなかった。

次に、日本語教育における専門書読解指導の観点から、重点的に指導すべき事柄として、1. 格助詞相当連語、2. 連体修飾の「の」、3. 長文、難解文の分析、4. 漢字語彙の語構成とその結合ルール、その他をあげた。

最後に、本研究の結果から再認識されねばならないと思われたことについて記す。それは日本語中級教科書間の差異ということである。今回調査した二つの中級教科書について、読みの難易の観点からみて、少なからぬ差異が認められた。この事実から、中級と一口に言っても、使用する教科書により学習者の読み能力の到達水準に、かなりの差が生じることは明らかである。教科書選択にあたり、教師はそのことを深く認識しておく必要があるし、さらに、教科書編集にあたっては、教科書選択の指針、評価基準となるものを読み能力の面から明示することが望まれる。

(注)

- 1 日本語教育学会ニュース 35号 1985、9
- 2 樺島忠夫、寿岳章子「文体の統計的観察」(論集日本語研究8「文章文体」有精堂1979 に収録) p,179
- 3 「読みやすさの基礎調査」(「昭和27年度国立国語研究所年報4」に収録) p,123
- 4 「「読みやすさ」の基礎的研究」(「昭和26年度国立国語研究所年報3」に収録) p, 98
- 5 山本一枝、田山のり子、坂本恵「大学一般教養学問書の文体的特徴について——中級読解教材開発を目的として——」
(日本語教育学会、第6回研究例会発表 1985、9月)
- 6 3と同じ。

- 7 3と同じ。P, 118
- 8 野元菊雄「話しことばに近づく新聞文章」(朝日選書 101「ことばの昭和史」朝日新聞社 1978に収録) P.P, 162~197
- 9 8と同じ。P, 167
- 10 3と同じ。P, 117
- 11 8と同じ。P.P, 170~173
- 12 4と同じ。
- 13 4と同じ。P.P, 101~102
- 14 4と同じ。P.P, 96~97
- 15 5と同じ。
- 16 5と同じ。
- 17 小西栄一, 深見哲造「線形代数, ベクトル解析」 培風館 1978
- 18 越田豊「教養の生物学」培風館 1972
- 19 白井良明, 辻井潤一「情報科学 22 人工知能」 岩波書店 1982
- 20 長谷川貢他 「人間の心理学」 哲明出版 1974
- 21 真島英信 「生理学」 文光堂 1955
- 22 遠山諦虔「哲学の精神」北樹出版 1972
- 23 5と同じ。
- 24 文法評準表(「外国人に対する日本語振興に関する報告集」文化庁文化部国語課 1982, 7に収録)
- 25 木村新次郎「あいまいさを伴う表現の構造についての一考察」(「電子計算機による国語研究Ⅳ」国立国語研究所1972に収録) P, 56
- 26 20と同じ。
- 27 小海永二監修「だれでも書けるようになる小論文・作文」 ライオン社 P, 28
- 28 18と同じ。

(参考文献)

- 1 樺島忠夫「日本語のスタイルブック」
大修館 1979
- 2 市川孝「国語教育のための文章論概説」

教育出版 1982

3 応用言語学講座1 「日本語の教育」

明治書院 1985

4 林大監修 「図説日本語」 角川書店 1982